

春爛漫。でも、余震や原発の事を思うと、春の到来を心から喜ぶことができません。皆さまやご家族、ご親戚の皆さまはご無事でしょうか。九州地方は、震源地から離れているので、日々は変わりなく過ぎていますが、ニュースやラジオからの情報を得るたびに、この国はいったいどうなっていくのだろう、という言いようも無い不安に駆られます。そうはいても、私たちが今一番しなければならないのは、安心して食べていただけるお米をしっかりと作ること！いよいよ田植えに向けて準備が本格化しています。



皆さまに買い支えて頂き、またご紹介なども頂いているおかげで、毎年少しずつ田んぼの作付け面積が増えており、気がつけば3ヘクタール！これはサッカーコート5つ分と同じ位の広さです。これだけの田んぼを耕し、そして苗の準備をするとすると、頭も体もほとんど限界。田んぼごとに大きさも性質も違うので、それぞれにどれくらいの堆肥や有機肥料を入れるか。電卓を前に、耕太の頭からは煙が出そう。手伝おうにも、双子の妊娠以来、主戦力



ではなくなっている私は、力不足で受け付けてもらえません。上の子供たちが保育園に行き始めたことだし、これから数年で遅れを取り戻そう！と意気込みだけは十分にあるのですが…。機械の操作もしかり。朝から晩まで駆け回って夜にはくたびれ果てている夫を側で見ているのは、なかなか辛いものです。そんな私の代わりに、バリバリ頑張ってくれているのが、研修生の“もっさん”。子供たちは“おっさん”と呼んでいます（笑）。真面目で力持ち。トラクターの運転もすぐに覚え、やはり男手は頼りになります！

田んぼの準備と苗の準備を並行して進めます。田んぼでは、牛小屋でできた堆肥と有機肥料（鶏糞と油粕）を撒き終わったばかり。これらを土に混ぜ込みながら耕した後、水が溜まるように「畦（あぜ）」を塗り固め、水を溜めて「代掻き（しろかき）」を2回。これで田植えができる状態になります。一方、苗を準備するためには、まず種まき。昨秋に残しておいた「種籾（たねもみ）」を選別し、中身の詰まった種だけを水に浸します。下の写真は、水に浮いてしまった中身のない種籾をすくい出しているところ。カラカラに乾燥していた種籾がだんだん膨らんで、そこから芽が出てくる様子には、生命の神秘を感じます。それを苗箱と呼ばれる長方形の箱に蒔き、2週間ほどすれば立派な苗になる…はず。言うは安し、行うは難し。病気になるかもしれないし、お天気と水のかけかた次第で苗の育ち方も変わってくるし。なかなかイメージ通りにはいかないものです。



次は、我が家のニュースです。関東以北の友人・知人に「阿蘇へどうぞ」と声をかけたところ、春休みシーズンだったこともあって次々と関東圏から「避難民」が到着。一番多いときには、我が家の人口が23人にまで増えました！こうなったら楽しむしかない。ということで、バーベキューをしたり、雨の日に屋内コートを借り切ってスポーツ大会をしたり。その後18人になると、「わぁ、少なくなったねえ」と。慣れてすごいですね。長期滞在メンバーの子供の最年長が6歳で、以下ワラワラと7名。上の子が下をみる、というよりは保育園のよう。都会から来た子供たちが泥んこになって転げまわってみるのを見るのは微笑ましいものでした。友人たちも、山菜取りをしたり、水源めぐりをしたり、それなりに楽しめた様子。周囲の人に心配されるほど大変ではなく、食べる人数も多い分、作ったり片付けたりする人数も多いので、むしろ普段よりも家が片付いていたほどでした。保育園などの開始に合わせて4月上旬で皆が去った後、一人でやらなければいけない家事の多さに、啞然。合宿生活を懐かしく感じたものでした。以下、大家族の模様をいくつか写真でご紹介します。



山の間伐もしました。耕太のおじいちゃんとおばあちゃんが苗を植えたという杉。几帳面だった祖父がしっかり手入れしていたおかげで、節もなく、気持ちいいほどまっすぐによく育っています。植えてから30年が経ち、間伐の時期を迎えました。森林組合が倒した木を、リースした機械を使ってできる限り自力で運び出します。倒しただけで、山に放置されることも。道が整備されていないため、運び出したところで赤字が出てしまうからだそうです。でも、戦後植えた木々が国内でたくさん切り時を迎えているのも事実。被災地の復興にもぜひ国産材を使って欲しいものですが、切つてすぐに使えるものではありません。50年、100年の計画が大切です。



さて来月の通信までには、田植えが終わっている予定です！その前に控えているゴールデンウィーク。暗いニュースが多い毎日ですが、澄んだ空気と清らかな水を味わいに、ぜひ南阿蘇にもお越しくださいね。どうぞ皆さまお元気でお過ごしください。